

ネットワークの意味合いとそのタクソノミー

朴 容 寛

はじめに

1. ネットワークの概念とその性格
 - (1) ネットワークの概念
 - (2) ネットワークの諸性格
2. ネットワークのタクソノミーの必要性
3. ネットワークのタクソノミー
 - (1) ハーバーマスの行為理論とネットワークの分類
 - (2) 関係的合理性とネットワーク
 - (3) ネットワークのタクソノミー

おわりに

はじめに

今日、社会の至るところで「ネットワーク」という言葉が非常に多岐に使われ、その意味や使い方が曖昧になることがあり、単なる流行語として使われる傾向も見られる。ネットワークには、織物や構造物のような物体の網状の状態ばかりではなく、道路網・鉄道網・テレビ／ラジオ放送網・電話網・コンピューター通信網・LAN/VAN・インターネットなどの人々の関係形成やつながりのインフラとしての役目を果たすネットワークがある。一方、厳しい環境変化の中で生き残り、コンピタンスを保持していくためには組織の構造を従来のツリーからネットワークへ変えなければならないといわれている。また、情報の収集、ノウハウの獲得のためには情報リンクをはり、それを戦略的に活用すべきだとか、組織内で早く出世するためには如何なる組織内外のパーソナル・ネットワークを組むべきか¹⁾などの議論もある。他方、昔から農村地域における田植えや屋根ふきなどの隣近所付き合いのネットワークや阪神・淡路大震災の時に立ち上がったボランティアのネットワークもある。そして、アメリカのシリコン・バレーを日本のなかに移植しようとする志をもっている人々が結びつき、広がりつつある SVJ (Smart Vally Japan) もある。

このように、あるネットワークは人々の関係形成のインフラであり、あるネットワークは目的合理的行為によって媒介されたものである。また、あるものは、ある価値の実現ないし社会の諸問題などに共感している人々が自ら動きだしてつながっているネットワーク

である。そういうわけで、ネットワークには様々なタイポロジーが可能であり、それぞれのタイプによってその意味や性格は異なるし、その形成原理などが異なると考えられる。これらの明確な区分なしにネットワークを語ると、第2章（ネットワークのタクソノミーの必要性）の中で検討するような諸矛盾が現れるようになる。

本稿では、このような状態にあるネットワーク論の理論化や体系化のためにネットワークの概念と諸性格を明らかにすると同時に、そのタクソノミー（体系的な類型枠組み）などを試みたい。

1. ネットワークの概念とその性格

(1) ネットワークの概念

オックスフォード英語辞典によれば、ネットワークは糸・ワイヤーなどの網織物ばかりではなく、相互連結されてなしている網、網状、またはその属性を表わしている。より具体的には、網の状態をなしている構造物、河川・運河・鉄道などの様態、電気回路網・放送網、相互連結された人々のグループや組織などを表わしている。比喩的には非物質的なものが相互連結されなしているチェーンまたはシステムをも意味している²⁾。

それゆえ、一般的にネットワークとは物質的なものであれ、非物質的なものであれ、網状をなしている構造的ないし様態、またはその属性を表す用語であるといえる。リップナックとスタンプス (Lipnack, J. & J. Stamps) は、物理的ネットワーク、社会的ネットワーク、あるいは抽象的ネットワークなどの全てのネットワークを包括しうる一般的な定義を試みている。つまり、「一つの全体として了解される世界であり、その内の諸変化にもかわらず、そのアイデンティティを維持し得るもの」をネットワークであると論じている。リップナックらは、さらにネットワークはただの従属的な部分の寄せ集めではなく、ホロンであるし、部分同士の相互作用があることに注目し、ネットワークは「全体のアイデンティティを保ちながら相互作用する部分からなる一つの全体」であると定義し直している³⁾。

しかしながら、第2節（ネットワークの諸性格）で詳説するように、ホロンというメタファーを通してネットワークを説明することには限りがある。そればかりではなく、ヒエラルキーも全体のアイデンティティを保ちながら相互作用する部分からなる一つの全体であると解釈することができるので⁴⁾、リップナックらのネットワークの定義は少し直しなければならないと考えられる。

ベルタランフィ (Bertalanffy, Ludwig von) とラポポート (Rapoport, Antole) によれば、一般的にシステムとは相互に作用する要素の複合体として⁵⁾、「一つのユニットとして了解される世界であり、その内の諸変化にもかわらずそのアイデンティティを維持することができること」である⁶⁾。この定義からすれば、ヒエラルキーもネットワークも二つ以上の構成要素があり、全体のアイデンティティを保ちながら相互作用し、シナジーを生

み出している一つの統一体であるといえる。それゆえ、ヒエラルキーと区別しうるネットワークの定義が必要になる。ヒエラルキーとネットワークとは如何に異なるのかは第2節(ネットワークの諸性格)にゆずり、ここでは一応「自律的な部分が網状でつなぎ、全体のアイデンティティを保ちながら相互作用している一つの統一体」をネットワークであると定義したい。

(2) ネットワークの諸性格

イ) リップナックとスタンプスの構造と過程モデル

リップナックとスタンプス (Lipnack, J. & J. Stamps) は、ジャーラックとハイン (Gerlach, L. P. & Virginia H. Hine) の SPINs (Segmented Polycephalous Ideological Neworks)⁷⁾ モデルを拡張し、五つの構造と五つのプロセスからなる「構造と過程モデル」を提示した⁸⁾。つまり、彼らによると、ネットワークには目に見える五つの構造がある。ネットワークはホロン構造を持ち、独立した全体(自立的な参加者)と同時に相互に依存し合う部分としても機能するユニットからなる。あらゆるレベルが重要であり、メンバーはすべて同等である。ネットワークにおいては権限と責任が分散されている。また、ネットワークには多くの見方、多くの観点から目標や手段を見つめるようになっており複眼的である。そして、ネットワークには多数の指導者がいる。

さらに、ネットワークには目に見えざる五つのプロセスがある。ネットワークはメンバーの間の様々なリンク、関連、友人関係、信頼及び価値関係などの様々なパターンが織り混ざるダイナミックな諸関係からなる。その内部と外部との境界がはっきりしない。ネットワークは、ある時にはノード(結節点)としての役割を果たし、またある時にはリンクとしての役割を果たす。個人とグループが共に重要であるので、個人の価値と集団の目的との統合が成し遂げられる。ネットワークはメンバーたちが価値観を共有することによってがっちり結び結ばれる。

ところが、リップナックとスタンプスは次のように語ることによってネットワークとヒエラルキーとの区分を曖昧にしている。彼らは『ネットワーキング』や『ネットワーキング・ブック』で次のように述べている。

“十の特性はそれぞれ、ネットワークおよびネットワーキングについての一つの重要な考え方を示している。全てのネットワークは、これらの側面あるいは特性のうち、二、三とは言わないまでも、少なくとも一つは持っている。このネットワークの包括的な概念は、ネットワークを他の形態の組織と区別する一つの一般形をつくりながら、一緒に作用しているこれら十の側面をも包むものである。”⁹⁾

また、『チームネット』では、次のように記している。

“大ざっぱに言って、ビジネス・ネットワークは水平的ないし垂直的に組織される傾向がある。ACE ネットのような垂直的ネットワークは、プロセス、製品、あるいは製品ラインの部分を統合する。メタルワーキング・イニシアチブのように水平的ネットワークでは規模と柔軟性の利益が得られる。”¹⁰⁾

ここで問題になるのは、リップナックらは「官僚組織のこまごましさと階層組織の硬直性から、ネットワークの自由で適応力に富んだ性質を区別」し¹¹⁾、効率性や利便性の追求を最優先目標としてきた産業社会の諸論理の行き詰まりに対する一つの歯止めの役割を果たしているとしながら、上のように述べていることである。また、彼らが従来のヒエラルキー組織と区別されるネットワークの側面として挙げている「ホロン」(部分と全体の統合)、様々なレベル、様々な関係、個人と全体などは、実は従来のヒエラルキー組織にもある属性であると解釈することもできる。

まず、「ホロン」(部分と全体の統合)というネットワークの特性から検討したい。彼らは次のように語る。

“ネットワークはそれ自身が一つの全体であると同時に、より大きなもの的一部分になっている。ネットワークの参加者は、その人自身で全体であると同時に、もっと大きなもの、すなわちネットワークの一部でもある。…(中略)…ホロン(全体部分)の例として、人間は一人の独立した個人であると同時に、家族の一員でもある。家族は一つの独立した社会単位であるとともに、地域社会の一要素でもある。地域社会は、個人と家族の集合体であると同時に、国家や世界の一部でもある。”¹²⁾

彼らはケストラー(Koestler, Arthur)のホロンという概念をもってネットワークを説明しようとする。ところが、ヒエラルキー組織においてもメンバー一人一人は独立した個人であり、同時に全体組織のメンバーであるともいえる。個人を構成員とするグループ、つまり課あるいは部などは、それ自体独立した全体であると同時に、組織の全体の下部組織にもなる。もちろん従来の機械的組織観では、組織のメンバーを大きな機械の歯車のように見なしたことがある。しかし、個人を独立したメンバーであるとするか、機械の部品であるとするのかは見方の違いであり、それが組織の形態や特性を区別する基準にはならないだろう。

第二に、リップナックとスタンプスは「様々なレベル」をネットワークの構造的特性として次のように挙げている。

“ネットワークはヒエラルキーではないが、しかし各レベルがあるというパターンを反映している。あらゆるものがホロン(全体部分)であるように、あらゆるものは、

各レベルを持つというパターンに沿っている。全体も一つのレベルであり、部分もまた一つのレベルである。原子、分子、細胞、器官、生体組織が、あるレベルの中でそれぞれ異なったレベルをなしているように、個人、グループ、組織、社会もあるレベルの中でそれぞれ異なったレベルをなしている。…(中略)…政府には、地方、州、国家というレベルがあり、通貨にはセント、ダイム、ドルといういろいろな値打ちのレベルがある。…(中略)…見えざる惑星（もう一つのアメリカ）というネットワークは、地球、国家、地域、州、草の根、家族、個人などの社会的組織のレベル間を取り扱っている。…(中略)…ネットワークはヒエラルキーという考え方を当然のごとく捨て去り、代わりに組織の内部や外部に対する方策においてレベルという考え方を自由に使っている。…(中略)…われわれはネットワークが権威主義的ヒエラルキーの罠に陥ることがないのは、「一貫性を尊重するレベル」のパターンにあると考えている。”¹³⁾

それでは、この特性がヒエラルキー組織と対比し得る特性となるだろうか。彼らも指摘している通りに¹⁴⁾、ヒエラルキー組織も様々なレベルからなる。一般的にヒエラルキー組織は係・課・部・局・事業体・全体組織などの様々なレベルからなる。したがって、レベルというパターンをもってヒエラルキー組織とネットワークとを区別し得ないだろう。

第三に、ネットワーク形成過程の特性として挙げている「様々な関係」について彼らは次のように語る。

“ネットワークは、それを構成している人たちの間に起こるダイナミックな諸関係によって成り立っている。…(中略)…様々なネットワークの生命線となっているリンク、関連、コミュニケーション、友人関係、信頼及び価値といった関係と結び付いているために、よく目に見えないようである。…(中略)…官僚組織は事務所や備品、駐車場等が象徴される。また、管理された習慣的な動作の固定した組織として現れるのに対し、ネットワークは様々なパターンが織り混ざった多様な組織である。”¹⁵⁾

しかし、ネットワークにおける関係とは異なるかも知れないが、ヒエラルキー組織も目に見えない様々な関係からなっており、それが命令であれ、協力関係であれ、様々なコミュニケーションをなし、様々な情報が流れる様々なパターンの多様体をなしているともいえるのである。

第四に、目に見えないもう一つのネットワークの特性として、リップナックとスタンプスは「個人と全体」を挙げている。

“多くのネットワークは、自分たちのビジョンを、全体と個人の意義の両方を包含し、

かつ協力と全体の利益の重要性に関心を払うものとして表明している。…(中略)…人間は、一人一人が個人であると同時に全体なのである。…(中略)…ネットワークが個人の利益と集団の利益を一緒にしようとするとき、この両者はしばしば対立したり、曖昧になったり、おそらく矛盾したものになる。…(中略)…しかし、これらは互いに妥協しない対立物ではなく、互いに補足し合うような統一体である。”¹⁶⁾

この特性にはもちろん「個人の価値と集団の価値は同等」¹⁷⁾ であるという目に見えない価値を考慮にいたしたものである。ところが、この特性はネットワークの構造の特性である「ホロン」(部分と全体の統合)とほとんど同じ特性ではないだろうか。また、ヒエラルキー組織の理論の中でも様々な「個人の目的と組織目的との統合」モデル¹⁸⁾ があることは如何に説明しうるのであろうか。

リップナックらが特に注目しているのはネットワークとは他ならぬホロンの性格を持っていることである。だが、ケストラーが言っているホロンは、実際にヒエラルキー構造を持っていることはアイロニーである。ケストラーは次のように語っている。

“有機体は垂全体が層をなすマルチレベルのヒエラルキーなのである。このヒエラルキーを図にすればピラミッド、ないしは倒立した樹木のようになる。…(中略)…このヒエラルキーの構成メンバーの一つ一つがどのレベルにおいても垂全体、すなわちホロンであることだ。それは自己規制機構とかなり程度の高い自律性(あるいは自治性)を備えた、安定した統治構造である。…(中略)…細胞も筋肉も神経も、ヒエラルキーの上位のセンターに対し「部分」として従属しているが、同時に準自律的な「全体」としても機能する。まさに二面神ヤヌスである。…(中略)…どんな型のヒエラルキーも、その中の各レベルは一連の普遍の規則に支配されていることだ。ヒエラルキーを構成するホロンが一貫性、安定性、そして特有の構造と機能をもつ理由もそこにある”¹⁹⁾。

ケストラーが二面神ヤヌスとしてホロン革命を唱えたのは、これまで還元主義²⁰⁾ が陥った諸問題を指摘し、それを乗り越えようとした試みであり、機械の中の幽霊を追い出す試みでもあった²¹⁾。ケストラーのホロンはヒエラルキー構造や組織のオルタナティブではなく、むしろヒエラルキー構造をなしている。リップナックとスタンプスが、この階層的なホロンを用いてネットワークを従来のヒエラルキー組織と区別しようとするのはその出発点から問題があると考えられる²²⁾。したがって、リップナックらのネットワーク・モデルは精緻であるものの、さまざまな問題が潜んでおり、従来のヒエラルキー組織と区別する基準にはなれないと思われる。

ロ) ネットワークの諸性格

それでは、ネットワークをヒエラルキーと区別させるのは如何なるものであろうか。ここでは、主に人々のつながりとしてのネットワークを中心にネットワークの諸性格を検討したい。

まず、ネットワークとなるために欠けてはならない中枢性格として自律性、目的・価値の共有・共感、分権性を挙げたい。第一に、ネットワークがヒエラルキーから区別されるのは、自主的ユニットの自律的な繋がりであるのか否かであり、自主性に疑わしい部分があり、他律性に支配される余地が多い大企業グループ、財閥や多国籍企業などの連結は厳密にはネットワークと呼ぶことには限りがある。第二に、ヒエラルキーでは与えられた目的を達成するために管理される啓蒙的協働が行われるとすれば、ネットワークでは一定の目的・価値を共有あるいは共感する自主的な人々が自律的にコミットメントする自発的協働が行われているといえる。第三に、ネットワークは、集権的でありかつヒエラルキー構造の対極に位置するもので、水平的構造を持つ分権的システムである。それゆえ、ネットワークでは誰でもリーダーになれるし、同時に多数存在しうる。この場合のリーダーの役目はコントロールすることではなく、ネットワークの諸活動がうまくできるように促進したりサポートしたりすることである。リーダーは、マネージャーではなく、コーディネーターあるいはファシリテーターなのである。

次に、ネットワークが創造的ネットワークとなり、より生き生きとしたものとなるためにはオープン性 (open system)、メンバーの重複性 (overlap membership)、組織の余裕 (redundancy) などの性格があることが望ましい。本稿では、これらの性格をネットワークの周辺性格と呼びたい。第一に、ネットワークが生き生きとして活気にみちたものとなるためには、誰もがいつでも参加したり、脱退したりすることができるオープンシステムであることが望ましい。ネットワークが追求している目的や価値に共感している人なら誰でも自由に参加し、共感し得なくなったり、合意し得なくなったりすれば、いつでも自由に離れ、自ら新しいネットワークを形成するか、あるいは自分が共感する他のネットワークに参加することができなければならない。第二に、ネットワークが硬直化されるのを防ぐためには、メンバーがいろいろなネットワークに重複して参加する必要がある。複数のネットワークに重複的に参加することは、ネットワークに新しい情報を流入させ、交差させ、結合させるので、同ネットワークに活力を与え、新しい秩序を形成する触媒の役割を果たす。第三に、創造的ネットワークになるためには組織の余裕、すなわち冗長性が必要である。ある一つの目標、一つの価値を実現するために最善の戦略一つだけを駆使すると、組織構成員らの自律性と多様な個性、互いに異なる意見や代替案などを受け入れにくくなるからである^{23, 24)}。

3. ネットワークのタクソノミーの必要性

人々のつながりや組織などを表わしているネットワークは、物体の網状から道路網・鉄道網などのインフラやインターネットのような情報通信網と性格や形成原理の点において根本的に異なるものである。しかし、これらは混同され論じられている。したがって、これらを含むネットワークのタクソノミーを試み、それぞれのネットワークの概念や形成原理を探る必要がある。これらの区分なしにネットワークを語ると、いろいろなパラドックスに陥る可能性があるからである。

たとえば、リップナックとスタンプス (Lipnack, J. and J. Stamps) は、『ネットワーキング』や『ネットワーキング・ブック』では、ネットワークを存続させ、結合させるのは、目的ではなく共有されている価値観であることを非常に強調したが²⁵⁾、『チームネット』になると、「明確な目的」こそがチームネットを成功させる鍵である²⁶⁾と主張する矛盾を侵している。リップナックらは、前者の著作の中では、もっぱら効率や生活の利便性などを追求した結果もたらされた諸問題に対するアンティテーゼとして広がりつつある新しい動きを「もう一つのアメリカ」あるいは「見えざる惑星」として描いた。ところが、後者の『チームネット』では、チームのネットワーク、つまり、「チーム」と「ネットワーク」という二つのアイデアを結びつけた「チームネット」を論じるようになる。リップナックらによると、チームとは、小さく同じ場所にあり「共通の目的を達成するために、焦点、動機、技能をもって共に活動する人たちの小グループ」である。そして、ネットワークとは「異なる人の集団やグループが共通の目的に基づいて一緒に働くためにつながること」で、大きく広がり、緩やかにつながっているという意味をもつ。彼らは、このチームネットはお互いに競争優位を得るために組織の内と外の壁を越えて協力する新しい組織であり、その成功要件は、統一的な目的、独立したメンバー、自発的リンク、複数のリーダー、そして、相互的作用するレベルであると強調した。

一方、公文俊平は、「説得・誘導力の行使が、主体間の相互制御行為の主な型となっているような社会システム」を総称して「ネットワーク」と呼び、さらに、一つの主体とみなすことができる「ネットワーク組織」と、主体とは見なしがたい「社会型ネットワーク」とを峻別した²⁷⁾。ここでは、社会システムの分類、つまり脅迫・強制型社会システム、取引・搾取型社会システム、そして説得・誘導型社会システムという分類に問題が潜んでいると考えられる。なぜかという、この分類はある主体が自分の究極的な目標を実現するために、如何に他主体の行為を制御するかという戦略的な行為を基本前提としているからである。つまり、「他主体の行為を変更（発現、断念、持続、停止）させること、即ち他主体の行為の制御が、その主目標」となっている²⁸⁾。これはある主体が望ましいと考える状態を達成するための戦略的行為に他ならない。相手を如何に自分の目標達成のために利用し、コントロールするかに関心があるのである。それ故、その一方的な制御戦略が

「操縦」であり、双方向的な制御戦略が「交渉」となるのである。そして、前者は「強制」、「搾取」、「誘導」、そして後者は「脅迫」、「取引」、「説得」にそれぞれ分類され、これら戦略がマトリックスに組み合わされると、三つの基本的な社会システムのパターンとなるわけである²⁹⁾。企業なり、市場なり、国家なりは相互制御戦略であるとしても、ネットワークの全てが自分の目標達成のための戦略的な行為に属するわけではなく、表出的ネットワーク³⁰⁾、あるいは相互行為的ネットワークもあるのである。

4. ネットワークのタクソノミー

ネットワークというのは、相互に網状でつながっているひとつの統一体であり、その名詞相当語句であるネットワークキングは、相互に網状で連結する行為またはそのプロセスを表わしている。ネットワークとは、そもそも中立的なものであるが、人々の行為によってその意味や性格などが異なると思われる。このような理解から本稿では、ネットワークを人々の行為と関連づけて類型づけたい。

(1) ハーバーマスの行為理論とネットワークの分類

ハーバーマス (Habermas, J.) によると、人々の行為には道具的行為、戦略的行為、そして相互行為がある。彼は、1968年の「イデオロギーとしての科学と技術」という論文のなかで、ウェーバー (Weber, Max) の「合理化」を、新たに労働 (目的合理的行為ないし成果志向的行為) と相互行為 (コミュニケーション的行為) とに区別した。また、目的合理的行為を「道具を用いた行動」と「合理的選択」とに区分した。前者は「経験的知識に基礎をおく技術的な規則にしたがって行われる」行為、つまり対自然的な行為であるとするれば、後者は「分析的知識に基礎をおく戦略にしたがって行われる」行為、つまり「戦略的行為」であるといえる。「相互行為」は「記号に媒介された」行為であり、「強制力の通常の規範に従うものだが、この規範は相手の行為に対する期待に一定の枠をはめるものだから、少なくとも二人の行為主体によって理解され、承認されなければならない」³¹⁾。

このハーバーマスの議論をネットワークの分類へ応用するならば、今日張り巡らされつつある情報通信ネットワークなどの物理的なネットワークは「道具を用いた行為」に、効率を上げるための組織上の仕組みとして導入されているネットワークなどは「戦略的行為」に、さらに、自律的なユニット同士が自由に繋がって広がっているネットワークは「相互行為」に、それぞれ当たるだろう。本稿では、それぞれのネットワークを「道具的ネットワーク」、「戦略的ネットワーク」、そして「相互行為的ネットワーク」と呼ぶことにする。

(2) 関係的合理性とネットワーク

ハーバーマスによれば、言語能力と行為能力を有する主体が、自分の行為を十分に根拠づけ、正当化することができれば、彼らが行う行為は「合理的」である。目的志向的行為は目的達成に有効的である時に、コミュニケーション的行為は相互主観的な基本的な知識が共有され、その行為 (言明) が根拠づけられるときに、それぞれ合理的になる³²⁾。つま

り、目的志向的行為には「認知的・道具的合理性」が、コミュニケーション的行為には「コミュニケーション的合理性」がそれぞれ働くわけである。

人間本来の相互関係の回復という動きとして広がりつつある相互行為的ネットワークには(狭義の)「コミュニケーション的合理性」³³⁾が働くのだといえる。それでは、目的志向的行為から導かれて形成されつつある戦略的ネットワークには、いかなる合理性が働くといえるのであろうか。ヒエラルキー組織では特定の目的を達成することは自己目的化され、組織のメンバーはそのツールとして見なされた。組織内のコミュニケーションは職務関係からなる命令ないし仕事の流れとして見なされ、ピア・ツー・ピアとのコミュニケーションはインフォーマルにしか考えられなかった。これに対して、戦略的ネットワークは一応組織の目的を効率的に成し遂げるために形成されるが、そこではシステムの目的と組織のメンバーの目的との統合が求められ、メンバー一人一人の個性や独創性を認めざるをえなくなる。組織のメンバーを自律的な個人であると認めるばかりでなく、メンバー相互間でも互いにピアとして協力しなければならない。しかも、そのメンバーは流動的であり、プロジェクトによって入れ変わる。また、必ずしも一人が一つのプロジェクトチームに属するわけではなく、いくつかのチームに属することも多い。そして、そのメンバーが組織外部のプロジェクトチームに属して活動したり、外部の専門家が組織内のチームに加わったりする場合もあるので、組織構成員を目的志向的活動だけに閉じ込めることは難しくなる。したがって、戦略的ネットワークには目的合理性が働くと同時に、限られてはいるがコミュニケーション的合理性も働くのだといえる。これは広い意味での「コミュニケーション的合理性」である。本稿では、このようにネットワーク一般に働く合理性を、(狭義の)「コミュニケーション的合理性」と区別するために「関係的合理性」と呼びたい。道具的ネットワークにせよ、戦略的ネットワークにせよ、相互行為的ネットワークにせよ、いずれにも関係的合理性が働くのだといえる。

さて、ハーバーマスが論じている「コンセンサス」とは、そもそも異なる意見や差異が存在している社会の中で、強制による合意ではなく、言語能力と行為能力がある自主的な主体が十分に議論してから到達する状態である。また、コンセンサスといっても必ずしも完全な100%のコンセンサスでなく、多数の意見を称するものである、と柔軟に解釈できる。そして、コンセンサスが象徴しているのは、互いの了解を志向し、論拠を提示して議論する態度ないしその価値観であるとも解釈できる。理想的なコミュニケーション的状况では、あらゆる対話者同士の異なる意見や矛盾などが無視されるのではなく、互いにそれを尊重しながら、十分に議論し、納得しあい、了解しあっていくのである。それゆえ、コミュニケーション的合理性には、事柄の結果よりも、合意を形成していくプロセスを重んじる価値観も含まれていると思われる。

したがって、関係的合理性が働くネットワークでは、「差異や対立があってその結果何かあつれきが起こったり、誤解が生じた場合、共有しているものの一部を取り出して議論し

たり反論したりする」ことがありうる。金子郁容が論じているように³⁴⁾、ネットワークは、必ずしも価値観や目的意識の共有ではなく、コンテキストという意味伝達のメディアを共有して広がりつつあるといえる。コンテキストを共有している人々が「互いの違いを主張しながらも何らかの相互依存関係をもち」、自律的につながりをもつなかで新しい意味や価値を発見したり、自己を実現したりするとき、この行為には関係的合理性があるといえる。

(3) ネットワークのタクソノミー

道具的ネットワーク、戦略的ネットワーク、相互行為的ネットワークは、公文俊平が指摘しているように、一つの主体として見なすことができることもあれば、一つの主体として見なしがたいこともありうる。本稿では、前者を「ネットワーク組織」、後者を「ネットワーク関係」と呼びたい。

一方、塩原勉によると、組織論がカバーする領域には、組織分析または組織体分析、組織連関論、社会運動の政策と工作におけるモビリゼーションを解明する領分の三つがある³⁵⁾。つまり、組織論は狭義の組織論（組織体分析論）、組織間関係論、社会運動組織論などの領域に分かれている。

ネットワークの諸タイプと組織論がカバーする領域とのマトリクスが、本稿が考えているネットワークのタクソノミーである。

表 ネットワークのタクソノミー

タイプ		領域		
		組織内	組織間	社会運動領域
戦略的 ネットワーク	ネットワーク 組織	・SAS ・ミスミ社 ・W.I. ゴア・アソシ エーツ	・戦略的提携 ・分社ネットワーク	・社会運動組織
	ネットワーク 関係	・コネづくり ・昇進ネットワーク	・中小企業ネットワーク	・資源動員ネットワーク
相互行為的 ネットワーク	ネットワーク 組織	・COARA ・LCC ・プロジェクトJ ・SVI, SVJ	・JC: SVN	・民間ボランティア組織
	ネットワーク 関係	・友人関係 ・付き合い関係	・ボランティア組織間 関係	・ネットワーキング
道具的ネットワーク		インターネット、イントラネット、EDI、電話ネットワーク、道路・鉄道ネットワーク、パソコン通信ネットワーク等		

註1) SVI: Silicon Valley, Inc., SVJ: Smart Valley Japan

2) JC: SV: Joint Venture: Silicon Valley Network

たとえば、組織体のレベルでは組織の構造自体をネットワーク型に編成するばかりでなく、組織メンバーにネットワークにつながるように行動することを勧めたり、その形成や

利用の仕方に対する社内訓練プログラムを提供している会社も増えている³⁶⁾。また、組織間関係レベルでは、激しい環境変化や核心技術の開発時間の長さや固定コストの大きさなどに効率的に対処する一つの方法として戦略的提携ネットワークが強調されている。そして、社会運動組織レベルでは、社会運動をより効果的にやり遂げるためには社会的ネットワークがきわめて重要であるといわれている。これらは、どちらかといえば戦略的ネットワーク論がカバーする領域であろう。

これと同じように、相互行為的ネットワーク論も組織内ばかりでなく、組織間関係にも、社会運動組織体にも観察される。たとえば、結い、田植えなどの対等な人々相互の、双務的な付き合い関係のネットワークばかりでなく、組織論においても、はやくも1930年代のメイヨー (Mayo, Elton) らの人間関係論、特にレスリスバーガーとディクソン (Roethlisberger, F. J. and William J. Dicson) は、組織におけるインフォーマルな関係のネットワークを強調した³⁷⁾。また、組織間レベルでは産・官・学、そしてコミュニティとの協力関係であるジョイント・ベンチャー方式 (Joint Venture Way) にも、SVI (Silicon Valley, Inc.) と SVJ (Smart Valley Japan) との連携関係にも、ボランティア団体間の相互協力連帯関係にもみられる。そして、社会運動組織レベルでは、ボランティア活動組織を含む新しい社会運動の組織パターンであるネットワークングに多く観察される。

おわりに

現実の「道具的ネットワーク」、「戦略的ネットワーク」、そして「相互行為的ネットワーク」は相互浸透、あるいは相互融合していることも、一つのネットワークに二つないし三つの側面が同時に備わっていることも見られる。それゆえ、同じネットワークも参加者の意向あるいはシステム側の意向などにより、ある側面では「戦略的ネットワーク」に、ある側面では「相互行為的ネットワーク」にもなりうる。

「戦略的ネットワーク」は、組織論の流れからみるとコンティンジェンシー・セオリーのコンテキストから理解でき、どちらかといえば、目的活動の要になる「戦略的行為」に由来している。「戦略的ネットワーク」では、もはや目的合理的行為、つまり、認知的・道具的行為だけでは、変化の激しい状況へ適応できなくなったので、組織のメンバー個人に「コミュニケーション的行為」を認めなければならなくなったことを雄弁に物語っていると考えられる。したがって、従来のヒエラルキー組織のうちに「戦略的ネットワーク」が形成されているのは、効率性や利便性などを最優先目標としてきた産業の論理の行き過ぎに対して、一つの歯止めの役目を果たすと同時に、没人格的な組織運営から生じる人間疎外などの問題解決への一つの道になるのではないかと思われる。

これに対して、「相互行為的ネットワーク」は一応、効率性や利便性などを最優先目標としてきた産業の論理に対して対抗、あるいはオルタナティブのロジックをなしながら、形成され広がっているといえる。しかし、後者は前者の原理に反抗して、そのオルタナティ

ブを唱えるものの、それを完全に否定すると自分自身がなくなるパラドックスに陥ってしまう。ネットワーク組織ももう一つの組織である以上、その組織たるために必要最小限の効率、目的追求のための手段性を持たなければならないのである。本稿ではこのようなパラドックスをハッチオン (Hutcheon, Linda) にならい「批判的共犯性」³⁸⁾ と呼びたい。

ところで、ミヘルス (Michels, Robert) は集団活動は必ず寡頭制の鉄則に陥るのだ³⁹⁾ と主張したが、戦略的ネットワークや相互行為的ネットワークなどは例外であろうか。パウエル (Powell, Walter W.) も言っている通りに「ネットワークも年をとる」(An editor's networks can also age or ossify)⁴⁰⁾ のではなかろうか。したがって、ネットワークのヒエラルキー化の傾向を防ぐためには、ネットワークのオープン性の維持、メンバーの重複性の奨励、冗長性の許容などの方策を講ずる必要があることはいうまでもない。

注

- 1) 安田雪「パーソナル・ネットワークと昇進速度——戦略か偶発か」『ネットワーク事例研究会』(金子郁容主催) 九月定期研究会 (1996. 9. 27) 報告文。
- 2) *The Oxford English Dictionary*, Vol. X (1989), p. 345f. 同辞典にはこのようにネットワークは、名詞としてばかりではなく、動詞としても使われている。動詞としてのネットワークは、①網でカバーする、②ラジオまたはテレビ放送網を設け、同時に放送する、③データ転送、プロセシング能力の共有、または作用負荷の分有などの多様な機能を持たせ、また、多くの場所からアクセスすることができるように (多数のコンピューターを) 相互に連結することを意味する。
- 3) J. Lipnack & J. Stamps, *The Networking Book: People Connecting with People*, New York and London: Routledge & Kegan Paul, 1986 (以下では『*The Networking Book*』と言う)、pp. 161-164.
- 4) 公文俊平は、数学的・物理的ネットワークを紹介しながら、その社会科学的な分析にも直接援用する可能性を述べている。つまり、「要素間の相互連結関係」としての数学的ないし物理的なネットワークの定義は「狭い意味での物理的な対象に限らず、ほとんどのあらゆる社会システムは、主体ないし複合主体であれ、主体とは言えない社会型のシステムであれ、すべてこの意味でのネットワークだと見なすことができる」と、述べている。しかし、彼は賢く次のように論じている。「ネットワークという概念を社会システムのある特定の種類のものだけに對して適用し、それによって、その種の社会システムの特徴を他の種の社会システム (例えば市場や組織) と比較しようといった目的にとっては、このような一般的な数学的ないし物理的ネットワークとしてのネットワークの定義だけでは足りない」といっている。数学的・物理的ネットワークの定義だけでは、従来の理論と区別する実益がほとんどなくなるからでしょう。つまり、資本・労働関係や商品関係も、パワーによって媒介されるヒエラルキー組織も、価格によって媒介されている市場メカニズムも、全てネットワークになり得るからである。公文の用語を使うと、複合主体 (国家、企業、智業) ばかりではなく、社会型システム (国際社会、世界市場、地球智場) もネットワークではないことは一つもないという結果になるからである (公文俊平『情報文明論』139-146、221-249頁)。
- 5) ベルタランフィによれば、システムには総和的特性と構成的特性がある。総和的特性は、複合

体の内にあっても外にあっても同じような特性なので、ばらばらにしたとき知られる個々の要素の特性と振る舞いを全部たし合わせることによって得られる。構成的特性は、複合体内部での特定の関係に依存する。したがって、この特性を理解するためには、部分だけでなく関係も知らなければならない。「全体は部分の総和以上のものだ」というのは、構成的特性はばらばらにされた部分の性質から説明できないことを意味する。複合体の特性は、それゆえ、要素のそれと比べると新しく、また創発的なもののように見える [Ludwig von Bertalanffy, *General System Theory: Foundation, Development, Applications*, New York: George Braziller, 1968 (長野敬・太田邦昌訳『一般システム理論』みすず書房、1973、11、28-33、50-51頁)。

- 6) 『*The Networking Book*』 pp. 161-162.
- 7) SPINs とは、「分節的、多中心的でイデオロギー的に統合されたネットワーク」である。分節的とは、多くの異なる集団からなる細胞型であることを意味する。多中心的とは、多くのリーダーもしくは指導の中心を持つことを意味する。ネットワークされていることは、それぞれの分節やリーダーが、多様な構造的、個人的、およびイデオロギー的なつながりを通じて、網状のシステムないしネットワークに統合されていることを意味する [Dabid Ronfeldt, "Tribes, Institutions, Markets, Networks: A Frame-work about Societal Evolution," 1996. (「部族、組織、市場、ネットワーク」公文俊平編著『ネティズンの時代』NTT 出版、1996、171-172)。
- 8) J. Lipnack & J. Stamps, *Networking*, New York: Ron Bernstein Agency Inc., 1982 (社会開発統計研究所訳『ネットワークング』プレジデント社、1984 (以下では『ネットワークング』という)、35-41、271-300頁)。
- 9) 上掲邦訳、274頁；『*The Networking Book*』 p. 139.
- 10) J. Lipnack & J. Stamps, *The Teamnet Factor: Bringing the Power of Boundary Crossing Into the Heart of Your Business*, New York, 1993 (つる田栄作監訳『チームネット』富士通ブックス、1994 (以下では『チームネット』という)、211頁)。
- 11) 『ネットワークング』36頁。
- 12) 上掲書、274-275頁；『*The Networking Book*』 pp. 139-140.
- 13) 『ネットワークング』276-280頁；『*The Networking Book*』 pp. 140-143.
- 14) 『ネットワークング』280頁；『*The Networking Book*』 p. 143.
- 15) 『ネットワークング』287-288頁；『*The Networking Book*』 pp. 148-149.
- 16) 『ネットワークング』292-294頁；『*The Networking Book*』 pp. 151-153.
- 17) 『ネットワークング』293頁。
- 18) John H. Barrett, *Individual Goals and Organizational Objectives: A Study of Integration Mechanisms*, The University of Michigan, Institute for Social Research, 1970.
- 19) Arthur Koestler, *Janus*, London: Hutchinson & Co. Ltd., 1978 (田中三彦・吉岡佳子訳『ホロン革命』工作舎、1983、56、68頁)。
- 20) 科学のある分野での研究対象である事象の単位よりも、下位段階の基本単位の事象の機構に言及することによって、もとの分野での現象を説明したり理論を構成すること、またはそのようにしてできた仮設や理論を言う。たとえば、感覚器官、神経系、運動器官などの機能によって、人間や動物の意識や行動の起こり方を説明しようとするものを言う (森岡清美ほか編『新社会学辞典』有斐閣、1993、221頁)。

- 21) 前掲邦訳；Arthur Koestler and J. R. Smythies ed., *The Alpbach Symposium*. 1968. *Beyond Reductionism: New perspectives in the life Sciences*, London: Hutchinson & CO LTD., 1969 (池田善昭監訳『還元主義を越えて』工作舎、1984)。
- 22) リップナックらは、ネットワークを理解するためには新進化の四つの概念、つまり発生、包摂、変異、加速などの概念が有用であることを次のように述べている。進化論の発生の原理からいえば、「ネットワークには人類の歴史の上でまったく新しい特質」をもっている。次に、包摂の原理からは、ネットワークづくりは古くてかつまったく新しい人間の活動であり、従来の組織の諸形態はネットワークの中に包摂され、その特徴が持ち込まれているといえる。また、変異の原理によると、「今の混乱の時代を説明し、新しいネットワークは将来のその統合の形をつくるために、人類の進化の初期の段階に回帰していることを提示している」。最後に、加速の原理からは「組織の新しいレベルにつながる安定と変遷のサイクルは以前よりは短くなっている」といえる。したがって、リップナックらのネットワークの10ポイント・モデルというのは従来のヒエラルキー組織とある種の対極をなしているともいえるが、とはいえその完全否定ではない（『ネットワーキング』310-317頁；『The Networking Book』pp. 172-178）。
- 23) 具体的な内容は拙稿「ヒエラルキー組織論批判とそのオルタナティブ」（『総合政策論集』第2号、2001. 12、117-135頁）を参照していただきたい。
- 24) 中枢性格を完全に満たされないけれども、疑似的に充足されるものは準ネットワーク（quasi-network）と呼びたい。
- 25) 『ネットワーキング』283-284、290、295頁；『The Networking Book』pp. 7-8, 145-146, 153-154.
- 26) 『チームネット』55-82、85-86、92-93、99-100、210-211、265、268-271、284-285、323-327、333-339、342、348-349、386-387、412-413、416-421頁。
- 27) 公文俊平『情報文明論』NTT 出版、1994、127-146、159-220、234-240頁。
- 28) 上掲書、140頁。
- 29) 上掲書、139-146頁。
- 30) 金井寿宏『企業者ネットワーキングの世界』白桃書房、1994。
- 31) Jürgen Habermas, *Technik und Wissenschaft als Ideologie*, Edition Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1968. (長谷川宏訳『イデオロギーとしての技術と科学』紀伊国屋書店、1970、58-63頁)。
- 32) Jürgen Habermas, *Theorie des kommunikativen Handelns*, Bde. 1-2, Suhrkamp Verlag, Ffm., 1981 (河上倫逸ほか訳『コミュニケーション的行為の理論 (上)』未来社、1985、39-71頁)
- 33) ハーバーマスが用いる「コミュニケーション的行為」には広義と狭義がある。彼が人々の行為の分類を、目的志向的行為、規範に規制される行為、演劇的行為、コミュニケーション的行為などにわけるときにコミュニケーション的行為は（狭義の）「コミュニケーション的行為」である。しかしながら、『コミュニケーション的行為の理論』という際に用いるコミュニケーション的行為は、（狭義の）「コミュニケーション的行為」ばかりではなく、「規範に規制される行為」や「演劇的行為」までも含む広い意味での「コミュニケーション的行為」である。なぜかといえば、ハーバーマスは次のように論じているからである。目的志向的行為は、行為者と客観的世界との関連で行われるもので、「行為者は一定の状況のもとで効果を期待できる手段を選択し、適切な仕方でこの手段を用いる」行為であり、一つの目的の実現、あるいは望ましい状態への到来を促

す独我論的行為である。これに対して、規範に規制される行為は「原理的に孤立した行為者の態度にではなく、共通の価値に照らして行為する社会的集団のメンバーにかかわる」行為である。また、演劇的行為は「孤立した行為者にも社会的集団にも関係をもつものではなく、互いに観衆となり、観衆の目前で自己を表現する相互行為の参加者に関係をもつ」行為である。しかし、これらの行為は完全な意味での相互行為とはいえない。(狭義の)「コミュニケーション的行為」は、発話でき行為できる少なくとも二人の主体同士が、「自分達の行為の意図および行為を同意できるように調整するために、行為の状況に関して了解を求める」行為である(上掲邦訳、132-152頁)。

- 34) 金子郁容『ネットワークへの招待』中央公論社、1986、156-186頁。
- 35) 塩原勉『組織と運動の理論——矛盾媒介過程の社会学』新曜社、1976、91頁。
- 36) Nitin Nohria, "Is a network perspective a useful way of studying organizations?," Nitin Nohria and Robert G. Eccles eds, *Networks and Organizations: Structure, Form, and Action*, Boston, Massachusetts: Harvard Business School Press, 1992. p. 1.
- 37) George Elton Mayo, *The Human Problems of an Industrial Civilization*, Fourth Edition, 1933, 1960. (村本栄一訳『新訳 産業文明における人間問題』日本能率協会、1967) ; F. J. Roethlisberger and William J. Dickson, *Management and the Worker*, Cambridge: Harvard University Press, 1939.
- 38) Linda Hutcheon, *The Politics of Postmodernism*, Routledge, 1989. (川口喬一訳『ポストモダニズムの政治学』法政大学出版局、1991)。
- 39) Robert Michels, *Zur Soziologie des Parteiwesens in der modernen Demokratie: Untersuchungen über die oligarchischen Tendenzen des Gruppenlebens*, Neudruck der zweiten Auflage, Herg. von Werner Conze, Alfred Kroner Verlag/Stuttgart, 1957. (森博・樋口晟子訳『現代民主主義における政党の社会学——集団活動の寡頭制的傾向についての研究』木鐸社、1990)。
- 40) Walter W. Powell, *Getting into Print: The Decision Making Process in Scholarly Publishing*, Chicago and London: The University of Chicago Press, 1985, p. 203.

キーワード ネットワーク ネットワーキング 道具的ネットワーク 戦略的ネットワーク
相互行為的ネットワーク ネットワーク組織 ネットワーク関係
関係的合理性 批判的共犯性

(Yonggwon PARK)